

大人がかかるとヤバい 子どもの感染症

おたふく風邪

ヘルパンギーナ

流行の兆し

おたふく風邪(流行性耳下腺炎)や子どもの夏風邪「ヘルパンギーナ」が流行の兆しをみせている。国立感染症研究所(感染症研)のまとめによると、おたふく風邪は前回流行した2010年に次ぐ高水準にあるという。子どもに多い病気が、軽く見てはいけない。大人がかかると重い合併症を発症する危険性がある。

感染症の集計によると、6月20・26日は1医療機関あたりのおたふく風邪の患者報告数が1.13人。宮崎(3.03人)を筆頭に佐賀(2.91人)、鹿児島(1.95人)、福岡(1.76人)と九州全域に広がっているほか、大阪(1.72人)、神奈川(1.22人)、埼玉(1.44人)など大都市圏でも目立っている。おたふく風邪は4〜5年周期で流行を繰り返す。今回は2010年に次ぐ

感染研の集計による

と、6月20・26日は1医療機関あたりのおたふく風邪の患者報告数が1.13人。宮崎(3.03人)を筆頭に佐賀(2.91人)、鹿児島(1.95人)、福岡(1.76人)と九州全域に広がっているほか、大阪(1.72人)、神奈川(1.22人)、埼玉(1.44人)など大都市圏でも目立っている。おたふく風邪は4〜5年周期で流行を繰り返す。今回は2010年に次ぐ

高い水準だという。弘邦

10日程度うまく噛めない、飲み込めない、会話

ができないという症状が出ることがあります。この間、発熱し、頭痛

が全くとれない非閉塞性無精子症のリスクがあります。女性は卵巣炎にか

わっていると疑われます。(辛院長)

「中には1週間で症状が劇的に変化する『劇症1

型糖尿病』にかかる人もいます。そうなる前、数

時間多尿、嘔吐、腹痛などの症状が表れ、進行すると昏睡や意識障害が

出て死亡することもあります」(辛院長)



溶血性貧血などにも気を配るべきです」
こうした合併症だけでなく、糖尿病の発症リスクをアップさせることも忘れてはならない。糖尿病専門医で「しんクリニック」(東京・西蒲田)の辛浩基院長が言う。「突然、脾臓細胞が破壊されて、インスリンが全く出なくなる1型糖尿病は、その多くが自分で自分を攻撃する自己免疫疾患だといわれています。しかし、その中には発症前に上気道炎などの感染兆候が見られるものがあります。そのため、昔からウイルスが糖尿病発症にかかわっていると疑われて

無精子症や重篤な糖尿病発症も

やみやせきなどを紹介して広がります。そのため、学校の子どもだが、大人がかかると重症化するだけに注意が必要だ。18日前後の潜伏期があり、最初は首に痛み一人によつては40度を超える高熱になることがあり、それがもとでさまざまな重い症状が出る場合

髄膜炎も注意したい。脳の隣島を調べたところ、や脊髄の周りにはある保護膜が炎症を起こす病気を、おたふく風邪を発症した人の数%に起こるとされています。心筋炎、

実際、ウイルス感染で亡くなった小児の患者数も10年ぶりの高水準。手足口病やウイルス性胃腸炎の流行もこれからは本番だ。これらの中には2型糖尿病を含め、重篤な合併症を引き起こすものがある。子どもの感染症を甘くみてはいけない。

「他に、風疹ウイルス、EBウイルス、ロタウイルスなどが1型糖尿病に

関連するといわれ、おたふく風邪の原因菌であるムンプスウイルスもそのひとつだとされている」(辛院長)

徐々に血糖値が上が

り、症状がじわじわ表れる2型と違って、1型糖尿病は数カ月で悪化する。